

岡崎城総堀跡発掘調査 現地説明会（H30.7.21）

岡崎市教育委員会

〔発掘調査〕：平成30年7月2日～平成30年8月31日（予定）

〔調査経緯〕：岡崎市教育委員会では「岡崎城跡整備基本計画 - 平成28年度改訂版 -」（H29.3）に基づき、今後岡崎城跡の整備を検討するための基礎となる岡崎城の城郭遺構について、積極的に調査研究を進めている。この調査研究の一環として、今回岡崎城総堀跡の発掘調査を実施している。

〔総構えと総堀〕

- ・総構え：城のほか城下町一帯も含めて外周を堀や石垣、土塁で囲い込んだ城郭構造のこと。惣構え、惣曲輪とも呼ばれる。
- ・総堀：総構えを構成する堀のことを「総堀」という。惣堀とも。
総堀は城郭の最外郭にあたり、軍事上の防衛施設である。また、総堀で囲まれた城下町の特権区域を示す役割も担ったとする見方もある。

〔岡崎城の総構え〕

- ・天正18年（1590）に徳川家康の関東移封に伴い岡崎城主となった田中吉政が城郭拡張、城下町建設を進める。城下町を造成し商人を移住させ、それまで菅生川（乙川）の左岸の明大寺を通っていた東海道を城下に引き入れる（二十七曲り）。そして城下町を「総堀」で囲み「総構え」構造とした。
- ・総堀は北から東側にかけては旧来の谷地形を利用して堀を掘削し、西側は河川を堀として利用し土塁を築くことで整備したとされる。
- ・田中吉政が構築した総堀は東西部分とし、すべてが田中吉政の整備ではないとされるが、整備の着手や完了の時期については記した史料がなく詳細は不明。

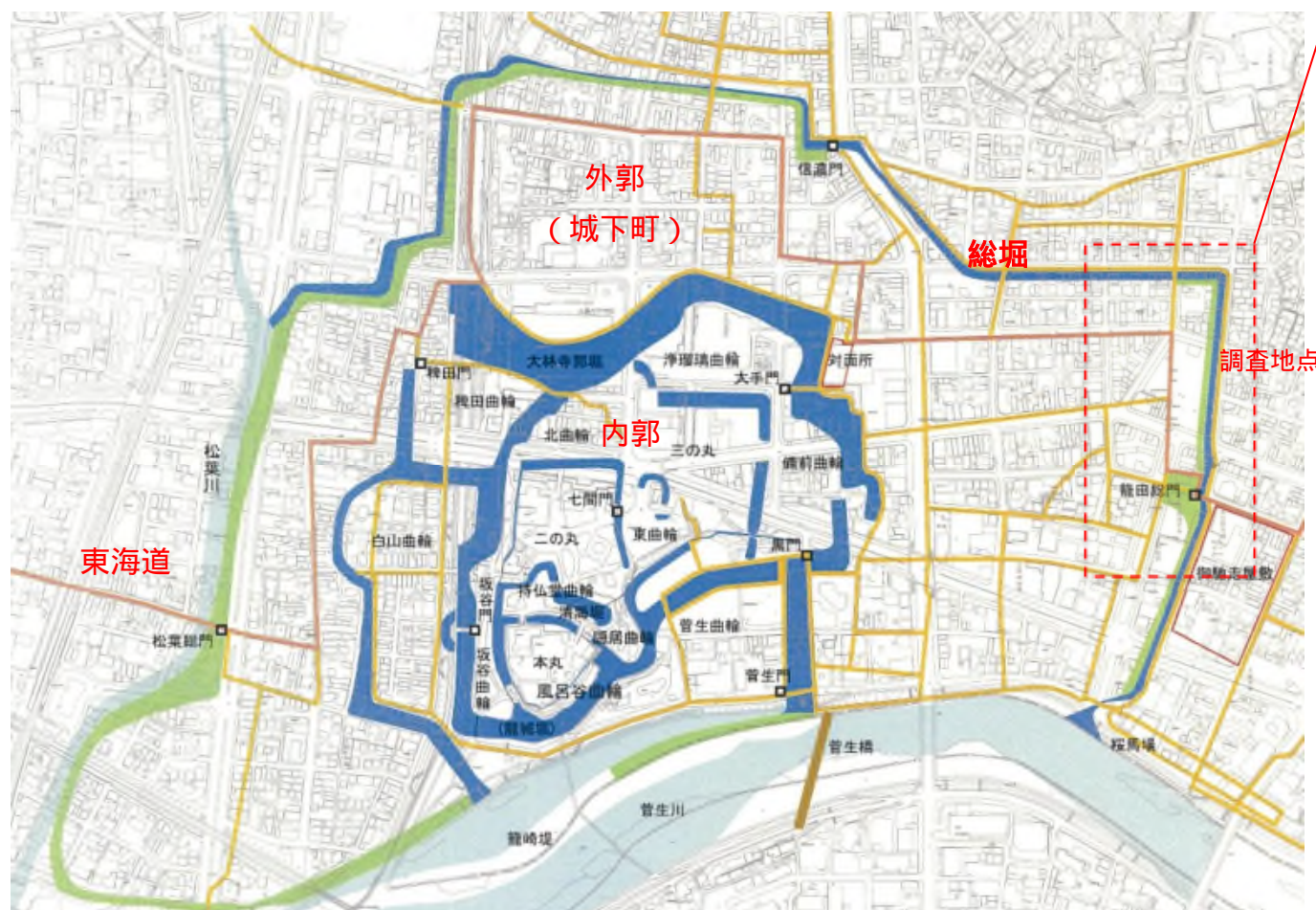


図1 岡崎城郭図と調査地点

〔絵図における調査地周辺の変遷〕



絵図 【17世紀前半】 絵図 【18世紀代】 絵図 【1800年頃】 地図①【1930年頃】

絵図：田中吉政の後に城主となった本多家（前本多）時代の絵図で、17世紀前半の状況を描いたとされる。絵図では総堀が「空堀」で表現されている。また総構えへの出入口である「籠田総門」が「傳(伝)馬口」と表記されている。

絵図：総堀が「水堀」となり、菅生川へと通じていることが分かる。また籠田総門は承応3年（1654）及び万治元年（1658）の改修後の状況が表現されている。この時、籠田総門の枡形及びその周辺の総堀が石垣化している。

絵図：基本的には絵図 からの変化はないが、籠田総門から北に延びる土塁に沿って石垣表現が加わる。土塁内側の裾部に描かれていることから、土塁内側の排水石組の可能性はある。

地図：昭和2～5年（1927～1930）作成。籠田総門より南側では地形として総堀の名残りが確認できるが、総門より北側では道路となりこの時までに総堀が埋められたことがわかる。

〔過去の調査成果〕

平成29年度に今回の調査区と同じ地点で小規模なトレンチ調査を実施している。今回の調査区の東側（現歩道部）にて落ち込む地形を確認し、総堀の堀肩と想定した。しかし、この堀肩の西側（城下町側）を現地説明会后に調査したところ、石垣と思われる遺構を確認している。今回の調査ではこの石垣と思われる遺構のさらなる内容確認を目的に実施している。また城下町側の土塁状の遺構も確認されているが、この詳細の確認についても調査目的としている。



図2 調査区配置図

〔発掘調査の状況〕

調査区の配置

発掘調査の調査区（以下、トレンチ）は3箇所を予定しており、現在トレンチ1の調査中で、今後トレンチ2・3を調査予定。トレンチ1・3では総堀の城下町側の堀肩や土塁の有無の確認を目的とし、トレンチ2では城下外側の総堀の堀肩の有無を確認することを調査目的としている。

〔トレンチ1調査成果〕

トレンチ1は総堀の城下側（西側）の状況を確認することを目的としている。調査前には堀肩（堀へ落ちていく始点）や堀内側に盛り上げられた土塁の痕跡、土塁よりさらに内側にあった町家の痕跡などが確認されることを想定して調査区を設定した。調査結果としては、調査区東側で石垣を確認したが、土塁や町家の痕跡については確認されなかった。石垣のデータは以下の通り。



写真1 調査区北側と石垣（南東から）



写真2 石垣全景（東から）

石垣データ

延長：残存長 2.85m / 最大高：1.2m / 5 段分残存

- 特徴：
- ・天端石は残存せず（本来の高さは不明）。
 - ・根石は地山直上に直接置かれ、胴木はない。
 - ・石材は地元産の花崗岩。
 - ・石材サイズ、ノミ加工は不統一。
 - ・十字に目地が通る。
 - ・石垣背後に斜面地形がみられる。
 - ・石垣前面の埋土に戦災ガラは含まれない。

寄せ集めの石材で構築したと考えられ、全体的に粗雑な石垣といえる。詳細な時期の特定は困難だが、明治時代頃のものとの推測する。石垣前面の堆積に戦災層を含まないことから戦前に埋没したと考えられる。石垣背後の斜面地形の理解に苦しむ。一般的な石垣であれば背後には一定幅で裏込め層を設けるが、傾斜することは不自然であり、旧来の総堀法面の残欠である可能性もある。

〔石垣は総堀石垣か？〕

【検討：絵図からの検討】

江戸時代に描かれた絵図（総堀まで含めた城郭図）は十数面残っている。それらの絵図を確認してみると江戸時代を通じて籠田総門付近の石垣を除き、総堀に石垣が描かれたものはない。



石垣は江戸時代のものとは考えにくい。

江戸時代のものではない場合、いつ、何の目的でこの場所に造られ、どのような機能があるのか？

【検討：位置的な検討】

水路と表現された総堀の痕跡が残る明治17年（以下 M17 と表記）の地籍図と現在の地図を重ねた図3と、大正2年に下水道計画のために行われた測量図4から位置的な検討が可能。これらの図から以下のことが分かる。

図3では総堀跡と東側道路との間に不自然な細かい短冊状の地割りがある。図4では道路と総堀跡の間に同様の空白がある。



総堀跡と道路との間の細かい短冊地割は総堀の堀底に向かう法面（土居）部分ではないか（総堀東側法面）。



総堀西側の法面は地籍図の地割上は認められないが、今回検出した石垣が総堀跡の西側法面付近に築かれたものではないか。

～ までの検討に基づき割り出される数値としては、

- ・M17 地籍図の水路（総堀跡）部分に「巾1間6寸」の記載。堀底幅は約 2.0m
 - ・M17 地籍図の水路（総堀跡）と検出した石垣との距離は約 5.0mを測る（図上実測値）。
 - ・総堀東側の法面は幅約 3.0mを測る（図上実測値）。
- ↓
- ・総堀の全幅（堀肩の端から端まで）は約 10.0mに推定復元できる。

〔まとめ〕

絵図の検討から石垣が江戸時代の構築とは考えにくい。近代以降に総堀跡付近に新たに掘り込みをして石垣を構築する必要性は見当たらず、旧来の総堀の名残が明治期にも残っており、これを踏襲して石垣が築かれたと考える方が自然である。近代以降に石垣が必要となる背景には旧来の総堀法面の崩落防止や修景等が想定されるが詳細は不明。また、石垣背後の斜面地形が総堀の法面の残欠である可能性もある。今後トレンチ3の調査により、石垣前面の状況（掘り込みがさらに続くのか等）を確認することでさらなる検討を加え、消えた総堀について検証していきたい。

現地説明会資料は現時点の見解であり、今後の調査により変更となる可能性があります。

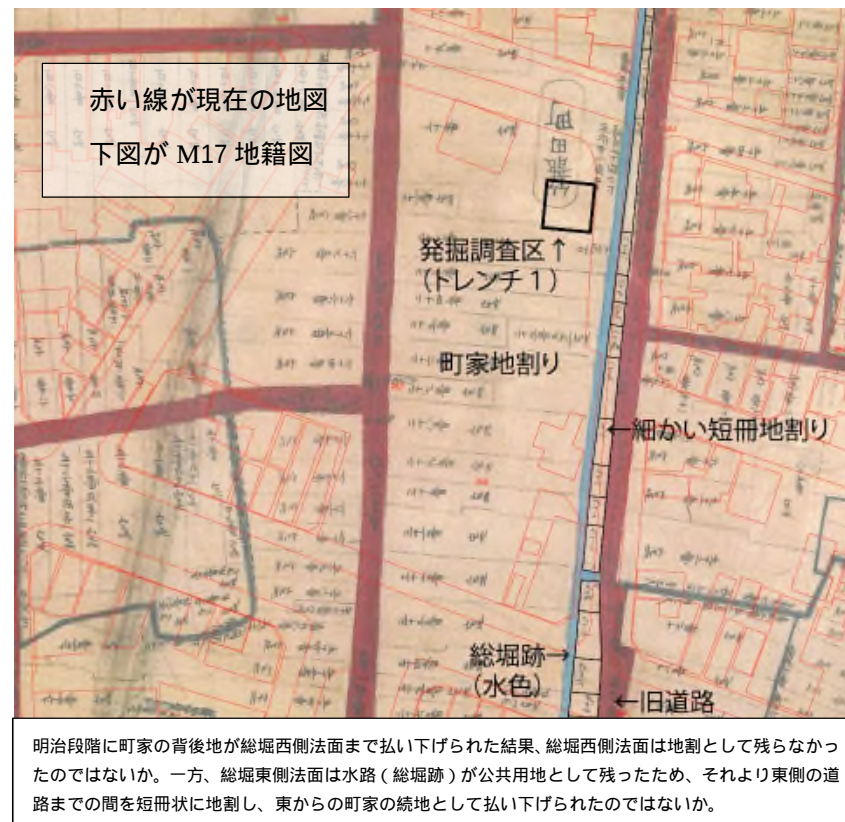


図3 M17 地籍図と現在の地図の重ね図



図4 岡崎市下水道平面図（大正2年）